

事物知覚と言語的意味との関わりについて

哲学と発達心理学の観点から

宮坂和男

(受付 2008年9月18日)

1. 序——ソシユール言語論の問題

日常の思考のあり様を振り返るとき、われわれはその中に言葉が深く浸入していることにしばしば気づかされるであろう。例えば「愛」について述べようとするとき、われわれは「愛」という言葉を用いずにはいることはできない。だが「愛」という心の働きは、目に見える事物対象ではないゆえ、「愛」という言葉に対応するものを知覚の中に求めることはできない。われわれが「愛」について考えたり述べたりするのは、「愛」と言う言葉が与えられてはじめて可能になっているのであり、われわれの思考は、視覚的経験から離れる仕方と言語が存在することによって成り立っているのである。

ヴァイトゲンシュタインが自らの「言語ゲーム」概念に「言語とそれが織り込まれる行為の総体」¹⁾という定義を与えていることはよく知られている。ヴァイトゲンシュタインの言語論がわれわれの関心を引くのは、ひとつにはそれが、言語の先行存在に関するわれわれの直感に合致するものを感じさせるからであろう。生きている限りわれわれは、絶えず何らかの行為するように強いられているが、そこにはほとんど不可分に言語が入り込んでいるように見えるのである。

そして、この言語の先行性を主張した議論としては、何と云ってもソシユールの言語論を挙げなければならないであろう。

結局、概念の純粹に思弁的なかたまり、言語から離れたかたまりは、それだけではそもそも何かを区別することができない、かたちのない星雲のようなものです。ですから同様に、言語についても同じことが言えるわけです。さまざまな概念が何か事前に存在するものを表象することはありません。a) それぞれきちんと区別され、事前に確立された概念も、b) これらを表す記号も存在しません。思考の中には、言語記号なしに明らかなものなどまったくないのです。これが重要なことです²⁾。

1) Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, §7.

2) ソシユール (影浦狭・田中久美子訳)『一般言語学講義 (コンスタンタンのノート)』(東京大学出版会, 2007年), 172頁

ソシユールの議論は、われわれが日ごろ何気なく感じていることをよく言い当てており、その点でわれわれを魅了する。そしてこのような議論から、物の知覚すら言葉によって枠どられてはじめて成り立つという見方が生じることになる。よく言及されるのは、虹を何色に見るかは言語や文化によって異なるという事実である。日本では「虹は7色」と言われるが、英語では虹を区切るときの色彩語は6つしかない。また、ローデシアの一言語であるシヨナ語では3色、ウバングの一言語であるバサ語では2色にしか区切らないという³⁾。このような事実に基づいて、ソシユール学者の丸山圭三郎は、知覚の場面でもまず言語が存在し、それを通してはじめて事物が見られることを、ためらうことなく主張する。

言語はまさに、それが話されている社会にのみ共通な、経験の固有な概念化・構造化であって、各言語は一つの世界像であり、それを通して連続の現実を非連続化するプリズムであり、独自のゲシュタルトにはかならない⁴⁾。

丸山がソシユールから引き出したこのような見方は広く浸透し、哲学研究者のあいだでは一定の常識を形成してきた感がある。

さて問題は、このソシユール=丸山的な見方が本当に正しいか否かということである。本稿はむしろ、この見方を批判的に検討することを企図する。この見方はいかに魅惑的であっても、大きな問題を残すからである。それは単純に言って、われわれの日常の知覚は、いかなる場合にも言葉のプリズムを介在させることによるのみ成り立つのか、という問題である。たとえば、われわれが道を歩きながら高層ビルを見るような場合を考えてみよう。われわれはビルを立方体的な形状のものとして見、そこに備わった窓やドアを長方形的なものとして捉えるであろう。このようなごく素朴な知覚も言語のプリズムを通してのみ成立し、どの言語圏に属するかによって異なったものになるのであろうか。

ここで先取りして言うておけば、われわれの考えでは、このような場合には知覚は言語とは関係なく成り立つ。われわれの考察はソシユール=丸山的な見方を否定し、むしろ逆のことを主張することになるであろう⁵⁾。すなわち、むしろ言語的意味の多くが物の知覚から生じており、言葉の理解は物の知覚に大きく依存していることを以下で論じることになるであろう。このわれわれの探求に素材を提供してくれるのは、以下に見るように、フッサールの

3) 丸山圭三郎編『ソシユール小事典』(大修館書店, 1985年), 79頁。

4) 同上。

5) ソシユールの見方に対する批判としては、すでに次のものがある。
菅野楯樹『恣意性の神話 記号論を新たに構想する』(劉草書房, 1999年)(特に第1章)。
また私も以前、反ソシユールの見方を提示したことがあり、本稿はその続編に当たるものである。
拙稿「知覚と言語的意味に関する考察 フッサール現象学に即して」, 『思索』第39号(東北大学哲学研究会, 2006年), 所収。

現象学と近年の発達心理学の知見である。

2. フッサール現象学における言語と知覚

まずフッサール現象学に即して問題を見てゆくことにしたい。意外に見えるかもしれないが、古典的な意識の哲学を思わせるフッサール現象学も、実は上に見たような〈知覚と言語〉の問題に深く関わるものにほかならない。フッサールが『論理学研究』において現象学の出立を記したとき、その本論（第二巻）の序盤（序論、第一研究）で示されたのは、言語の意味に関する考察であった。『論研』のフッサールは、言葉と事物との間で成り立っているかに見える指示の関係や、発話に伴う身振りや手振りを、言語にとって偶然的なものにすぎないと見なして排除している。この排除の作業はさらに、語音や文字をも除くまでに至っている。このような経験的・偶然的な要素を除いた上で得られるものこそが、言葉の真の意味だとフッサールは考えたのである。

われわれの関心がかつて感性的なものに向かっている場合、つまり単なる音声としての言葉（Wort）に向かっている場合にのみ、言葉は言葉であることをやめる。しかし、われわれが言葉の理解の中で生きている場合、その言葉は、誰かに向けられているか否かにかかわらず、表現を行なっているのであり、しかも同一のものを表現しているのである⁶⁾。

『論研』のフッサールは、言語的意味を物の知覚から離れた仕方捉えようとしている。そしてその際に述べられることは、またもやソシュールを思い起こさせるものにほかならない。ここで言われていることは、ソシュールが「記号の恣意性」と呼んだものに一致するからである。例えば、「犬」という語の意味内容は、それが[inu]と発音されたり、「犬」「イヌ」のように書かれることとは無関係に存立するということである。これらの日本語の語音や文字は偶然で恣意的なものにすぎず、それゆえわれわれは、「犬」の意味内容を、“dog”、“Hund”、“chien”のような他の様々な言葉によって表わすこともできる。またしてもソシュールの術語を用いて言えば、フッサールは物質的な「シニフィアン」を排除することによって、同一の本質として存在する「シニフィエ」を純粹に取り出そうとしているのである。

そしてフッサールはさらに、このような言語論的な視点に立って志向性一般を規定しようとしている。とりわけ『イデーニ I』においてフッサールは、「現象学的還元」によって意

6) Husserl, E., *Logische Untersuchungen II/I* (Max Niemeyer, 1980), S. 35.

識と対象との志向的相関関係を純粹に取り出すことを試みているが、ここで見出される対象（ノエマ）とは、基本的には言語的意味にほかならない。フッサールは、言語において見出される〈意味〉をあらゆる認識の場面にまで拡張して適用することを明言している。

われわれは、もっぱら『意味作用 (Bedeuten)』と『意味 (Bedeutung)』にのみ目を向ける。根源的には、これらの語は言語的領域すなわち『表現 (Ausdrücke)』にのみ関係を持っている。しかし、これらの語の意味を拡張し、適切な仕方に変様することは、ほとんど避けがたいと同時に重大な認識の進歩である。このことによって、『意味作用 (Bedeuten)』と『意味 (Bedeutung)』という語の意味は、一定の仕方でもエシス ノエマ領域全体に適用され、すべての作用に適用される⁷⁾。

「現象学的還元」の遂行の後に見出される意識は、〈意味〉を相関者とするものにほかならない。それゆえそれは「意味付与する意識 (sinngabendes Bewusstsein)」⁸⁾とも呼ばれている。このように〈意識－意味〉の結びつきを見出そうとする姿勢には、先に見たソシュール＝丸山的な見方に重なるものが窺える。『イデー I』までのフッサールの考え方は、知覚をはじめとするさまざまな認識や思考において、まず言語的意味による分節化が生じていると見る見方に非常に近い。このように見る限りでは、フッサール現象学は一種の言語主義であるかのようにすら思われるであろう。

もっともそれは一面的な見え方にすぎない。言うまでもなくフッサール現象学は、物の知覚を問題にするものであり、物の知覚の場面に定位して思惟を繰り広げるものにほかならないからである。この探求姿勢は『イデー I』より後に顕在化することになる。

『イデー I』では、時間の問題が意図的に考慮の外に置かれたため⁹⁾、意識によって保持される対象は、すでに言語意味的に成立した状態においてのみ考察され、それが生成してくる時間的過程は顧慮されなかった。このような限定的な見方は後に「静態的現象学 (statische Phänomenologie)」¹⁰⁾と呼ばれることになり、この探究のレベルにおいては、意識は「自然や文化 (学問, 芸術, 技術など), 高次的人格 (国家, 教会) などを保持している」¹¹⁾と言われることになる。

後の『デカルト的省察』では、意味が時間的に生成する過程を考慮に入れる「発生的現象

7) Husserl, E., *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch, Husserliana Bd.III/1 (Martinus Nijhoff, 1976), S. 285.

8) *Ibid.*, S. 120.

9) *Ibid.*, S. 181f.

10) Husserl, E., *Cartesianische Meditationen*, Husserliana Bd.I (Martinus Nijhoff, 1973), S. 110.

11) *Ibid.*

学 (genetische Phänomenologie)」の立場が表明されており¹²⁾、そこでは、意味がはじめて生じる原初的な場面への遡行が試みられている。そして、遡られるのは物の知覚の場面にはかならない。

われわれが生活の中で、存在する単なる物 (daseiendes blosses Ding) として、いわば出来上がった状態で出会うものは、受動的な経験の総合の中で、それ自体 (es selbst) という根源性において与えられる。このようなものとしてそれは、能動的な把握とともに始まる精神的な能動性に対して、あらかじめ与えられているのである¹³⁾。

またこの数行後では、「私は自我として、すでに最初の一瞥において、物 (ein Ding) を経験することができる」¹⁴⁾ と言われている。「発生的現象学」という探究の枠組みにおいてフッサールは、言語的意味をまったく除き去って物に出会う知覚の場面をたしかに想定している。そして、このような知覚のレベルは「受動性 (Passivität)」と呼ばれている。

フッサールはソシュールに近い立場から、それとは対照的な、物の知覚の優位を主張する立場に変わって行ったと見ることができる。事物知覚の先行性を主張するフッサールの見方は、素朴で古めかしいものを思わせるが、問題はこの見方が妥当なものか否かということである。

ここでは、すでに長らくこの問題について考えてきた現象学者である E・ホーレンシュタインの言うところを参照することにしよう¹⁵⁾。ホーレンシュタインは、フッサールの見方に賛同する姿勢を表明している。それどころか彼は、この点にフッサール現象学の大きな功績を認めている。われわれは言語の背後に遡ることができるのであり (Hintergebarkeit der Sprache)、言語から離れて物が単純に物として見られる経験の次元があるとホーレンシュタインは考えているのである。

フッサールの知覚分析は無味乾燥で退屈なものを感じさせることが多いが、その中でホーレンシュタインが着目しているのは、物の正常な (normal) 見え方があることをフッサールが指摘している点である¹⁶⁾。われわれが物を見るとき、その見え方は、光の当たり方や見る角度などの変動によって絶えずさまざまに変化しているが、その中でわれわれは、最も見えやすい状態において見えたように物が存在すると考える。たとえば白い風船を見る場合を考

12) *Ibid.*, S. 103.

13) *Ibid.*, S. 112

14) *Ibid.*

15) 本稿で参照されるホーレンシュタインの議論は、次の著書で示されているものである。

Holstein, E, *Von der Hintergebarkeit der Sprache; Kognitive Unterlagen der Sprache* (Suhrkamp, 1980). E・ホーレンシュタイン (村田純一ほか訳) 『認知と言語 現象学的探究』(産業図書, 1984年)。

16) ホーレンシュタイン, 同書, 94-96頁, 参照。

えてみよう。人工の赤い光が当たっているときには、それは赤く見えるであろう。だがそのとき同時にわれわれは、ほかの物も赤みがかって見えることを体験するし、また、別の機会に自然光のもとでは白く見えることなどを経験してゆくであろう。このような経験の全体的連関を顧慮して、われわれは、この風船が白く見えるのが正常な知覚だと考える。そう見なければ、われわれが経験してきたことの非常に多くが錯覚や間違いだということになってしまい、整合性が保てなくなってしまうであろう。このような正常な知覚の状態をフッサールは「最適の与えられ方 (optimale Gegebenheit)」と呼んでいる。

直観の領域においては、現出の多様性の系列の中から「最適の与えられ方」が際立ったのである。そこでは物は、「物そのものに帰属する」諸性質とともに現れ出る¹⁷⁾。

『イデーンⅡ』の第一篇第三章「感性的身体との関わりにおける感性的事物」の中でフッサールは、知覚がきわめて多様な変化を経過する中で、この最も安定した状態がたえず目指されていることを繰り返し論じている。この状態における知覚は「特別に志向されているという性格を備えており、そこに向かって『関心』は圧倒的に集中する」¹⁸⁾とフッサールは述べている。われわれは知覚において何より、物があるがままに捉えようとし、捉えたと確信できれば物を注視するのを止めるであろう。「経験の進行はそこで完結され、そこで充実される。これ以外の与えられ方は、この『最適』の与えられ方への志向的關係を持つ」¹⁹⁾のである。フッサールの知覚論が示していることは、われわれが常識的に考える知覚のあり様と一致すると言えよう。

なおここで付言しておけば、この知覚論は「現象学的還元」をどのように理解するべきかという問題にも関わってくる。「現象学的還元」という方法概念は、表明されて以来さまざま誤解を受け、この誤解はフッサールを大いに悩まし続けた。代表的な誤解は、現象学的還元が事物や世界の存在を否定するという理解であった。フッサールはこの誤解に答えようとするときにも、上記と同様の知覚論を示している（『第一哲学』第二部の序盤）。「現象学的還元」という方法概念によってフッサールが示そうとしたのは、個々の経験が錯視や誤りかもしれず、それと対比すれば意識の存在が確実だということではない。そうではなく、フッサールはむしろ、諸々の経験が全体的連関としては確かなものであると考えており、その上でそれが意識との関わりにおいて存在することを示そうとしたのである。経験はその全体において

17) Husserl, E., *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Zweites Buch, Husserliana Bd.IV (Martinus Nijhoff, 1976), S. 75.

18) *Ibid.*, S. 60.

19) *Ibid.*

確かなものであり、なおかつそれは意識によって保持されるとフッサールは考えたのである。

全体として捉えられた経験は、空間的な規定においては「世界 (Welt)」と呼ばれる。それは『イデーンⅡ』では「正常に構成された世界 (die normal konstituierte Welt)」, 「真なる世界 (die wahre Welt)」と言われ²⁰⁾, 『第一哲学』では「同一の世界 (eine und selbe Welt)」²¹⁾ のように言われている。これらが後期の「生活世界 (Lebenswelt)」という概念の先駆形をなしていることは明らかである。

ともあれフッサールは、言語から離れて物の知覚が成立し、言語的意味の地盤を形成すると考えている。見られてきたように、それはわれわれが日常営んでいる知覚と等しいものである。ソシュールの魅惑的な言説と対比させるとき、フッサールの見方は非常に素朴なものに見えるが、問題はこの見方が正しいかどうかということである。次節では、この問題を発達心理学の議論を参照しながら考えることにしたい。

3. プロトタイプ

言語から離れて物が単に物として見られるときの知覚、フッサールが「受動性」と呼んだ知覚の状態は、現実にはどのようなときに成り立つのであろうか。残念なことにフッサールはそれになかなか言及しないが、『デカルトの省察』のある箇所では、この知覚は「幼児期 (frühere Kinderzeit)」²²⁾ に成り立つと述べている。「受動性」を、単に理論的に要請されるものとして想定するのではなく、現実の事象として捉えようと思えば、たしかに幼児期の知覚が参照されねばならないであろう。人間には誰でも、言語を習得する以前に、この「受動的」な知覚を経験する時期を間違いなく持っている。フッサールの言う「受動性」とは、具体的にはこの幼児期の知覚のあり方を意味しているのである。

したがって問題は、言語が獲得される以前の幼児期の知覚はどのようなものか、ということである。たとえば幼児は、「犬」という言葉を憶える以前に犬を犬として見ることはできるのであろうか。

このような問題を考える研究領域は「発達心理学」と呼ばれており、とりわけ近年さまざまな実験や観察が積み重ねられている。U・ゴスワミが1998年に著した『子どもの認知発達 (Cognition in Children)」²³⁾ という書は、さまざまな研究者による探求成果を教科書風にまとめたものである。この書を参照しながらわれわれの問題について考えることにしよう。

20) *Ibid.*, S. 73.

21) Husserl, E., *Erste Philosophie*, Zweiter Teil, Husserliana Bd. VIII (Martinus Nijhoff, 1959), S. 46.

22) Husserl, E., *Cartesianische Meditationen*, S. 112.

23) Usha Goswami, *Cognition in Children* (Psychology Press, 1998).

U・ゴスワミ (岩男卓実ほか訳) 『子どもの認知発達』 (新曜社, 2003年)。

ゴスワミが解説しているところによれば、「犬」という語が学ばれる以前に、幼児が犬を犬として見ることはすでに明らかだという²⁴⁾。発達心理学上の研究によって、幼児はさまざまな犬をさまざまに見る過程を通して犬の代表的な視覚像を獲得することが、今日わかっている。しかもこの像は、それまでに見られたさまざまな犬の平均をなすものだという。すなわち、足や尾、首や毛の長さは、犬によってももちろん様々であるが、それらの平均的な長さを備えた犬を、幼児は代表的な犬として考えるということである。もし首が極端に長い犬がいた場合、幼児はそれを犬としてではなくキリンとして見るようである。位相が異なるが、フッサールの言い方に倣って、幼児は「最適の与えられ方」における犬を犬として認識すると表現することもできるであろう。

このような代表像は今日、心理学等の用語で「プロトタイプ (prototype) (原型)」と呼ばれている。発達心理学ほかの領域において、人間の知覚の原初的なあり方をこの「プロトタイプ」に基づいて解明しようとする作業が進められている。いま見られた犬のようなものだけでなく、さらにその根底に来る根元的なプロトタイプとして、図1のものがすでに明らかにされている²⁵⁾。われわれの知覚物は、原初的にはこれらのプロトタイプに基づいて分別されるということである。またさらに、これらのプロトタイプの獲得に先立って、乳児が円と十字とをはっきり識別できることも確かめられている²⁶⁾。

図1に見られるように、太線で書かれた円も細線で書かれた円も、また二重線で書かれた

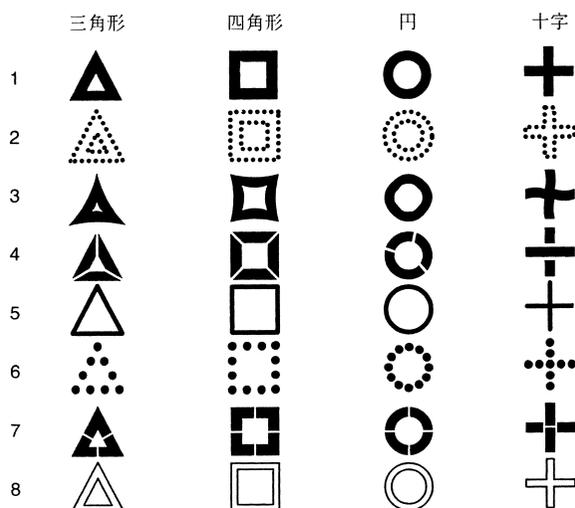


図1 初出は A. M. Slater & G. Bremner (Eds.), *Infant development*, 1989.

24) ゴスワミ, 同書, 45-46頁。

25) 同書, 30頁。

26) 同書, 28頁。

それも、等しく「円」と見なされ、同じカテゴリーに数え入れられる。また、いくつもの斑点が並んでいるのが見える場合、並んだ形が円形に近ければ、斑点の集合は「円」のカテゴリーに入るものとして見られる。図1に示された図形は、われわれが知覚物を分類するときの基礎的な枠組みとなっているのである。

さらに、このようなプロトタイプが存在するのは、形についてだけではなく、色についても同様であることがすでに確かめられている。B・バーリンとP・ケイの有名な研究²⁷⁾によって、色にも6個のプロトタイプがあることが明らかにされた。すなわち、黒、白、赤、黄、緑、青の6つが基礎的色彩であり、われわれが何らかの色を見る場合、これらのうちのどれかに近いものとして色を捉えることが分かっている。文化や言語によって虹の色の分け方が異なるという丸山圭三郎の説と、現実はかなり違うようである。

また、色の領域を区分する境界線の引き方は文化や言語によって異なるが、6つの基本色については、それに対応する波長の帯は文化や言語の違いに関係なく一致するという。たとえば、青と別の色とを区別する場合、どこに境界線を引くかは文化や言語によって異なるが、波長領域の中心に来る典型的な青（プロトタイプとしての青）に関しては、文化や言語に関係なく帯の範囲が一致するということである²⁸⁾。藍色を青から区別しない文化があるといったことがしばしば指摘されるが、それは、その文化の中で生きる人々の目に両者がまったく同じに見えるということではない。区別がないのは単に言葉上のことであって、色を直に見ているときに、この人々が両者を識別できないということではない。

個人的な話になるが、ドイツ人から会話を習っているとき、「信号が青のとき (bei der blauen Ampel)」と言ったところ、「青 (blau) ではない、緑 (grün) だ」と指摘され修正されたことがある。後日 (日本の) 信号をあらためてよく見てみたら、たしかに緑色をしていた。日本人はドイツ人に比べて「青」と「緑」との区別が明瞭でないということはあるかもしれない。だがこのことは、われわれ日本人が両者を識別できないということではない。われわれが「青信号」と言うのは、むしろ単なる言葉上の習慣にすぎないのであって、この言い方がわれわれの色彩分類のあり方を正確に反映しているわけではないのである。

ともあれ、発達心理学の研究成果によれば、人間は言語を獲得する以前の乳児期 (生後8ヶ月以前) に、言語とは独立に事物を知覚していることは明らかである。ゴスワミがまとめているところによれば、この時期に人間は、空間表象や物の永続性に関する認識²⁹⁾、数量関係

27) Berlin, B. & Kay, P., *Basic Color Terms; Their Universality and Evolution* (University of California Press, 1969).

なお、バーリンとケイの研究はもっと複雑な内容を含むものであるが、ここでは話を見やすくするために、それを非常に簡略化して示している。

28) ホーレンシュタイン、前掲書、94頁、参照。

29) ゴスワミ、前掲書、48-56頁。

や因果関係に関する認識³⁰⁾を獲得することが実験的に確かめられている。またさらにこの時期に、人間を動作主として理解し、生物と無生物とを区別する能力を身につけることも判明している³¹⁾。これらは、成人も含めたすべての人間が日常的に駆使する、必須の基礎的認識や能力にほかならない。これらを人間は、言語を獲得する以前に習得するのである。したがって、物の知覚をはじめとする言語以前の事象が、むしろ言語を根底で規定していると考えられるであろう。

4. 言語的意味の基礎としての事物知覚

言語がわれわれの思考の中に深く滲透してそれを強く規制していることはまちがいないが、それは、言語なしにはいかなる思考も成り立たないということではない。まして物の知覚が最初から言語によって規定されているということはない。それどころかむしろ、物の知覚は言語から独立して成立し、われわれの言語活動の基礎を形成していると考えられる。このことは、一部の言語論者にとってはすでに自明のことであった。G・レイコフとM・ジョンソンの『レトリックと人生』³²⁾は、このことを示す実例を豊富に紹介している書物である。この書で挙げられている例に即して、事物知覚が言語的意味の基礎となっている次第を瞥見することにしよう。

“He fell asleep.”（「彼は眠りに落ちた」）という文について考えてみよう³³⁾。あらためて考えてみれば、人が睡眠状態に移行するとき、上方から下方に向かう空間的な運動が生じているわけではない。それにもかかわらず、このことを記述するときには“fall”という言い方がされる。日本語でもまったく同様に「眠りに落ちる」と表現されるのは大変に興味深い一致である。推測するに、睡眠状態に入る現象には、地面にあいた穴の中に吸い込まれて行くことを連想させるものがあるのではないだろうか。同じことを別の言い方で表現しようと思っても、「眠りに入る」とか「眠りにつく」、「睡眠状態に入る」のように言う以外になく、空間的な移動を思わせない表現をするのは非常にむずかしい。空間中に存在する物の知覚が基礎になってこそ、このような簡単な事象を記述することもはじめて可能になっているのである。

このことを踏まえた上でわれわれは、幼児の言語獲得について発達心理学が明らかにしたことを、以下でさらに見て行くことにしよう。なおその際、本節ではヴィトゲンシュタインの論考を参照することにしたい。そうすることが、われわれのテーマについて考えるための

30) 同書, 58-67頁。

31) 同書, 67-72頁。

32) Lakoff, G. & Johnson, M., *Metaphors We Live By* (The University of Chicago Press, 1980). G・レイコフ, M・ジョンソン (渡辺昇一ほか訳) 『レトリックと人生』(大修館書店, 1986年)。

33) 同書, 20頁。

有効な視点を提供してくれるからである。

言葉が何かを意味することがいかにして可能になっているかという問題については、古典的な説明としてアウグスティヌスのものがよく知られている。それは、ヴィトゲンシュタインが『哲学探究』の第1節で引用して以来、特によく知られたものとなった。

彼ら（即ち、大人たち）が何か或る物の名前を呼んで、それに向かうとき、私はその様子を見て、彼らとその物を指示しようと欲するときは、彼らは彼らが発する音声によってその物を言い表すのだ、ということを理解した。……私は、……語が繰り返し言われるのを聞いて、その語が何を言い表すのかを次第次第に理解したのである。そして私は、私の口がそれらの語に慣れ親しむにつれて、それらの語によって私の欲求を表現していったのである³⁴⁾。

アウグスティヌスの説明は、われわれの常識に合致する、素朴なものだと言えよう。語の意味はそれが指し示す事物対象にほかならないとアウグスティヌスは言っているのである。周知のように、この見方はヴィトゲンシュタインの批判の対象になった。アウグスティヌスに対してヴィトゲンシュタインは次のように反問する。

ならば「5」という語の意味は何か？³⁵⁾

「5 (fünf)」という語の意味を、それが指示する事物対象によって説明することはできない。「5」という語にそのまま対応する事物はどこにも存在しないからである。リンゴが5個ある場合と靴が5足ある場合とを比べてみると、どちらについても「5」が言われているが、まったく異なるものが存在している。

では、事物対象を語の意味と見なす説明を斥けると、ヴィトゲンシュタインは語の意味をどのように説明するのだろうか。この問題はもちろん重要なものであり、これに答えようとすれば、ヴィトゲンシュタインの哲学の最も核心的な部分について述べなければならなくなる。ここでは要点のみを簡略にまとめることにしたい³⁶⁾。

34) アウグスティヌス『告白』第1巻第8章。訳文はウィトゲンシュタインの邦訳（黒崎宏訳『哲学的探求』（産業図書、1994年））による。

35) Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, §1.

36) 言葉の意味に関するヴィトゲンシュタインの論考については、私の理解は以前次の論文の中で示した。ヴィトゲンシュタインについて本稿で述べられていることの多くは、この拙稿の内容を要約したものである。

拙稿「言語ゲーム・規則・バックグラウンド——ヴィトゲンシュタインをサールによって補完する試み——」、『人間環境学研究』第4巻、第1号（広島修道大学人間環境学会、2005年）、所収。

ヴァイトゲンシュタインは、「5」のような語の意味をそれ自体として見て取ろうとはしない。そうではなく、人がこの語を規則に従って正しく使用することができる時、その人はこの語の意味を理解していると見なされてよい、とヴァイトゲンシュタインは考えたのである。そのためには数に関する規則をマスターしなければならない。それは他者によって教え込まれ、慣習として定着せられることによって達成されるとヴァイトゲンシュタインは考えた。

そしてこの過程が実現するためには、その前提として、まず数が数として理解される過程が通過されねばならない。「数」という概念は、生活の中で「1」「3」「7」「10」……のような具体的な数に、さまざまな機会に接する過程を通して得られるとヴァイトゲンシュタインは考えている。このことを言おうとしたのが、有名な「家族的類似 (Familienähnlichkeit)」という概念である。ヴァイトゲンシュタインによれば、「数とは何か」というソクラテス＝プラトンの問いに答えることによって「数」を理解することはできない。この問いに本気で答えようとするれば、どの数とも異なる「数そのもの」を示さなければならなくなるが、それは現実には不可能だからである。そうではなく、さまざまな具体的な数を現実を経験する中で、それらが何らか似たものとして見られ、「数」というひとつのファミリーに属するものとして捉えられるとヴァイトゲンシュタインは考えたのである。

言葉の意味について、アウグスティヌスの素朴すぎる見方を否定し、ヴァイトゲンシュタイン的な方向で考えようとする姿勢もまた、ソシュールの言語論と同様、近年の哲学研究者のあいだで一定の常識を形成している感がある。

だが、このドグマもまた修正を迫られていることを次に論じなければならない。発達心理学の研究成果によれば、幼児が言語を獲得する過程は、ヴァイトゲンシュタインの見方ではなくアウグスティヌスのそれに合致するからである。

幼児がはじめて言語を獲得するのは生後9ヶ月ころであるが、この時期に幼児は何か物を指さしながら声を発することが観察によって確かめられている³⁷⁾。たとえば猫を指さしながら「ニャンニャン」と言うようになるのである。そしてこれは、まず幼児が物を指さす動作を行なうようになり、それに答えて周囲の大人がその呼び名を示すことによって生じることが認められている。一見単純に見えるこの過程にも、実はかなり錯綜した事柄が数多く含まれているが、ここではそのうちの数点について述べることにしよう。

「ニャンニャン」のような語は最初、猫の視覚像と結びつく以前に自発的に発せられる。言葉が音声レベルで分節化されて知覚される過程は、生誕以前にすでに母親の胎内で始まっていることが分かっている。外部の音が羊水を伝わって胎児の耳に届くからである。その後時間を経て、生後7～8ヶ月の時期に幼児は「ニャンニャン」という語を自発的に発して反

37) 岡本夏木『子どもとことば』(岩波新書, 1982年), 138頁。

復するようになる。この時期に発せられる語は「喃語」と呼ばれるもので、まだ意味を伴わないものである³⁸⁾。

この後に指さしの動作が加わるのであるが、この動作が意味することも、最初はわれわれが理解するのとは違っているようである。というのは幼児は、名前を知ろうとして何かを指さすのではなく、自分の興味や関心を引きつける物を見て、うれしい気持ちや手にとりたい欲求から、その物を指さしたり、それに向かって手を伸ばすことが分かっているからである³⁹⁾。幼児は好きな玩具や菓子箱、カラフルな物などを凝視し、時にそれに向かって手を伸ばしながら喃語を発することが観察されている。

このとき幼児は、猫とはまったく違うものを指さしながら「ニャンニャン」と言うことが確かめられている。幼児は猫の呼び名として「ニャンニャン」と言っているわけではなく、自分の関心を引くものを見てこう言うのである。だが、周囲の大人はそれを見て「それはニャンニャンじゃないよ」と言ったり「そうだね、ニャンニャンだね」と言って幼児に反応する。つまり、幼児は指示（直示）という行為を、誤解されることを通して学びとってゆくのである⁴⁰⁾。

言語獲得がこのようなねじれを通過するということは、興味深いものを感じさせる。またしても個人的な話になるが、幼少時に裸電球が光っていることが非常に気になって、それに向かってしきりに手を伸ばしたことをなぜか記憶している。それを見た私の母は、私を抱き上げて電球に触らせ、「これ？ ほら、熱いよ」と言った。触ってみるとたしかに熱くて、小さな驚きを感じたことをよく憶えている。このとき私はたしかに、裸電球の呼び名を知りたくて手を伸ばしたわけではなく、光った裸電球の存在がとにかく不思議に感じられ、興味・関心から手を伸ばしたのであった。

このようなねじれた過程を経るものではあるが、ともかく、語が何事かを意味するという現象は、発達心理学が明らかにしているところによれば、ヴァイトゲンシュタインの見方よりもアウグスティヌスの説明に合致する。このことは今日どの分野にあっても、言語を考察する者ならば銘記しなければならないことであろう。幼児はまず、言語から離れて物を物として知覚し、その後に物の呼び名として語を一つずつ習得してゆくという過程を辿るのである。

言語的意味の多くが物の知覚を基礎としていることは先にも見たが、きわめて重要なことなので、いま一度例を見ながら確認しておくことにしたい。次の文を検討してみよう。

38) 同書, 137頁。

39) 同書, 138頁。

40) 正高信男『子どもはことばをからだで覚える』(中公新書, 2001年), 116頁。

When you have a good idea, try to capture it immediately in words.

(よい考えがあったら、それをつかまえて言葉にするようにしなさい。)⁴¹⁾

この文の根底には明らかに、言語以前の物の知覚が横たわっている。「考え (idea)」が、あたかもパンやコップと同じように手で持たれたりつかまれたりするかのようにならされているからである。日本語でもまったく同様に「考えを持つ」とか「アイデアをつかまえる」のように言われる。もちろん実際には、「考え」がパンやコップのように存在することはない。だがわれわれは、物になぞらえなければ「考え」に関する事柄を言語で表現することはできない。つまりわれわれは、日常語においてすでに、物の知覚に喩える仕方でメタファーを用いているのである。

このように物の知覚が言語表現に滲入している事例は、至る所に見出されるであろう。日本語では「～に対して愛情をもつ」とか「子どもに愛情を注ぐ」のような言い方がされる。どうやらわれわれは「愛」を、物や液体に似たものとして思い浮かべるのではないだろうか。もちろんそれは空間中に物として存在することはない。それは、親子や家族の触れあい、恋人同士の振る舞いなどの光景をさまざまに見、それらの中に何やら類似したものがあることを感じる中で把握されるものであろう。先にも触れたように、ヴィトゲンシュタインはこのことを「家族的類似」と呼んだ。

この場合、現実にはまずはじめに「愛」という言葉が教え込まれることは、十分に考えられることである。その後にはじめて、親子や恋人の情景にこの言葉が適用されるのを見て、「愛」という事象が理解されるのかもしれない。「愛」という言葉を知らなければ、愛について述べることはたしかに非常にむずかしいであろう。

だが、このような過程が辿られるとしても、われわれはやはり物の知覚を離れて「愛」を理解することはできない。いま見たように、物や液体に喩えなければ、われわれは「愛」について語るができないからである。かなり抽象的な概念について述べる場合でも、われわれは物の知覚に基づくのを避けることはできない。

では数の場合はどうであろうか。アウグスティヌスに対してヴィトゲンシュタインが「ならば『5』の意味とは何か？」と反問していることは、先に見た通りである。たしかに数はさらに抽象性の度合いが高い存在者であり、具体的な事物から離れていることを感じさせるものである。それゆえこの問題を挙げることによって、ヴィトゲンシュタインはアウグスティヌスを批判したのであった。5のような数が、物と同様にそのものとして出会うことはない。ヴィトゲンシュタインの言うように、われわれは加減乗除をはじめとする計算の方法

41) レイコフ&ジョンソン、前掲書、13頁。強調は原文。

を学校で教え込まれ、数に関するさまざまな規則を習って、数字を正しく用いることができるようになったとき、数の意味を理解したと言われるであろう。

だがこの場合、われわれは物の知覚からまったく離れ去っていると言うことはできるだろうか。アウグスティヌスが述べたのとは別の位相においてではあるが、この場合にもわれわれはやはり物の知覚に依拠していると言うことができる。というのは、数学史家が指摘しているように、計算において数を操作するとき、人間は原初的には点の集まりを用いてきたからである⁴²⁾。地面や紙に「●」のように書きつけて、それを「1」と見なすわけである。「 $2+3=5$ 」は、「●● ●●●」のように思い浮かべられる。この思い浮かべ方を利用した計算機が、もちろんそろばんである。四則計算をはじめとするさまざまな数の操作において規則を正しく適用できるようになったときでも、思考の最も根底の層においては物の知覚が働いていると言うことができるのである。

5. 言語と記憶：結びにかえて

事物知覚の役割を強調するわれわれの議論は、あるいは言語の果たす機能を非常に小さいものに思わせるかもしれない。言語の役割が小さいということは無論ないが、このことを十分に論じようとするれば、別にあらためて論考をなさなければならないであろう。ここでは、発達心理学が明らかにした言語の働きについて簡単に述べて、結語に代えることにしたい。

発達心理学が解明した言語の機能としてゴスワミが解説していることは、哲学研究者にとっては意外なものである。すなわち発達心理学によって明らかにされたところでは、言語が果たす最も大きな役割は、われわれの記憶を強化する点にあるという。幼児は3歳以前にはほとんど何も記憶せず、それ以後に次第に記憶能力を高めてゆくが、この過程は言語能力の発達と平行するものだというのである。幼児は経験された事象を命名し、それを内語において（無意識のうちに）反復することによって、経験を記憶にとどめるようになるという⁴³⁾。たとえばある日雨が降ったことを経験したとき、「今日は雨が降ったなあ」と心の中で（無意識のうちに）何度もつぶやくことによって、雨が降った事実やその時の風景、状況等を記憶するのである。このように言語を記憶と結びつける見方は、これまでの哲学にはほとんどなかったもので、注目されるべきものであろう。

雨が降ったときの風景や状況は、一度記憶にとどめられれば、別の機会に思い出される態勢が整う。後日もう一度雨降りに逢うとき、過日に経験された雨の風景や状況が思い出され、これに重ね合わせるようにしてわれわれは現在の降雨の風景を知覚するであろう。このとき

42) 吉田洋一『零の発見 数学の生い立ち』(岩波新書, 1939年), 117頁。

43) ゴスワミ, 前掲書, 第5章。

もわれわれは内語において「今日も雨だなあ」のように無意識のうちにつぶやいているのではないか。このようにして、われわれは雨に関する経験や知識を積み重ねてゆくであろう⁴⁴⁾。

この場合注意しなければならないことは、われわれは、保存された記憶に突き合わせながら風景を見たり状況について考えるのであって、言語から与えられたゲシュタルトを通して分節化しながら風景を知覚しているのではない、ということである。たしかに言語は知覚に影響を与えているが、それは上に見たように、記憶を強化する働きを通して、過去の経験の参照を可能にしているということであって、言語の働きは間接的なものにすぎないのである。ソシュール＝丸山的な見方が妥当しないことは、ここでもう一度強調しておきたい。

また、注目されてよいと思われるのは、上で見た過程において「類似」や「アナロジー」が大きな役割を果たすことが指摘されていることである。記憶の蓄積においては「類似した知識が多重に表象されている」⁴⁵⁾とゴスワミは述べている。以前雨を経験したときの風景や状況と、いまの降雨の風景や状況との間に、われわれは類似を見ているのである。このような類似に基づいて、われわれは「雨降り」という現象を一つのファミリーにまとめ、さまざまな経験を分類・整理するときの枠組みとして用いてゆくことになる。また雪が降る場合には、雨が降る場合とは別のファミリーにまとめるであろうが、それは雨と類縁関係にあるものと見なされるであろう。このように系統的に秩序づけられながら、経験の枠組みが構成されてゆくことになる。またゴスワミによれば、われわれは、未経験の問題にはじめてぶつかる時、類似した問題に対処したときの経験を記憶の中に探り出し、それと比較しながら解決を図ることが確かめられているという⁴⁶⁾。「家族」や「類似」といったヴェイトゲンシュタインの概念が発達心理学においても挙げられている⁴⁷⁾ことは、たとえ偶然であるとしても大変に興味深い一致であろう。

もとより、言語の働きを明らかにするという課題を果たそうとすれば、論じられなければならないことは限りなく多いが、それは今後の課題と見なして本稿を閉じることにしたい。

44) 降雨を知覚しているときに以前の降雨の風景が思い出される場合、この以前の風景は、フッサールの言い方をすれば、「二次的受動性 (sekundäre Passivität)」のレベルにあるものだと言ってよいであろう (Vgl. *Ideen...Zweites Buch*, Husserlian Bd.IV, S. 12ff.)。それは、能動的知覚が転化することによって形成される受動性のことである。われわれとしてはフッサールに対して、この二次的受動性には言語と記憶が大きく関わっていることを付言しなければならない。

45) ゴスワミ, 前掲書, 258頁。

46) ゴスワミ, 前掲書, 270頁。

47) ゴスワミ, 前掲書, 299頁。